
夢か現実か？？

ZERO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢か現実か??

【Nコード】

N6105Y

【作者名】

ZERO

【あらすじ】

何故か異世界に呼ばれた私は何故か魔王を倒してほしいと懇願されまあ自分にできるのならと 頑張ってみる主人公南涼（女、15歳）

主人公は現実世界で嫌なことがあり異世界で現実逃避することになりました。

第一話

夢を見ていた。とても楽しい夢。心がとてもあたたかく満たされるような夢を。だからこそ目覚めた時まだこれは夢なのかと思った。でもそんな私の考えを誰かが否定した。

「いいえこれは夢ではありませんまもなくお迎えがきます。起きてください」

優しい声に誘われるように私の意識は覚醒した。

目が覚めた私は回りの異変に気が付いた。回りが緑だらけいつの間に私の部屋はジャングルになってしまったのか。

たしか昨日はいろいろあって早々とベットに横になるなり寝入ってしまったのだ。なんだこれはとかなり私は混乱してしまった。

そんな私にまた誰かが優しく話しかけた。

「大丈夫です。時期に人が来ます。くわしい話しはその方達に聞いてください」

その声が聞こえてまもなく人の話し声が聞こえてきた。

第二話

「もう、なんでこんな森の中に召喚されてるのよ」

「しょうがないでしょ巫女様がちよつと失敗したらしいのですから」

そんな声とともに私の前には三人の男女があらわれた。そんな三人に驚いて固まってしまった私にどんどん近くにやってきた。

「大丈夫ですか？急な召喚でどこかお怪我をしたり気分が悪くなったりしていませんか？」

「いえ、気分が悪くなったり怪我なんかしていないんだけど。いたいここはどこなんでしょ？」

私の頭の許容範囲はもはやいっぱいいっぱいだと訴えているように酷い頭痛がしていた。

第三話

「ここはシルバー王国といって女王フリージア様が治めるくにです。あなたは理由あってこの国に召喚されたのです。」

なんだこの小説みたいな展開は。まさか魔王を倒す勇者にでもなれというんじゃないだろうか。そんなことごめんだな。ただでさえ面倒くさいのはきらいなんだ。そんなことやってるか。

「あのすいません。どうかなされましたか？やはり気分が悪いのでしょうか？」

私はその声で正氣に戻った。とにかく現状把握が必要だと考えた。

「あの、いったい何故私とその巫女様に召喚されたのでしょうか？」

「その事につきましても詳しくお話したいと思いますのでとりあえずお城のほうに参りましょう」

「そうよ、いつまでこんな森にいらなくてはならないのよ」

なんだこの女は急に大きな声をだしてイライラして更年期か？

急に女に睨まれたので私はいそいで視線を優しくそうな青年に向けた。

第四話

「さあ、お城のほうに参りましょう。あつ、その前に自己紹介をしましょうか？私の名前はレイチェル・クライス、どうか気安くレイとお呼びください」

「わかりました。レイと呼ばせていただきます。えっと、私の名前は南涼です。涼とよんでください」

そういつて私はぺこりと頭を下げた。

「わかりました。涼と呼ばせていただきます。」

そして、私は視線をあの女の人に向けた。

「私はフランチェスカ・クラウンよ。フラン様と呼びなさい」

「こら、なにをいつてるんですか。涼、フランでかまいませんからね」

私はいったいどっちで呼ぶべきなのかと考えたけど呼ぶ時に考えようと思えるのをやめた。

そして、私はレイの後ろに隠れていた女の子に目を向けた。

第五話

私の視線に気が付いたのかその少女は前にでてきた。

「私の名前はステファニー・シルバーです。シルバー王国の第4皇女です。どうかステフとお呼びください」

彼女は小さいながらも優雅に私に自己紹介してくれた。私に彼女と同じぐらいの妹がいるのでなんだかとても可愛く思えてきた。

「それではさっそくお城の方へ参りましょうか。すぐ近くですの。
」

私は彼ら三人の後をついてこの森を抜けいく。レイが言うように森を抜けると目の前にはかなり大きなお城があった。

「さあ、涼お城についてとりあえず着替えてそれがすんで女王と謁見してもらいます」

「はあ、なんだかめんどうだよ。どうしても会わないといけないの？」

「お会いしてもらわないとこれから先どうするかが決まりませんから。勝手なお願いになるんですが、涼にはぜひともやっていただかなければいけないことがあるんですよ」

「ああ、もう早く城にいくよ」

フランが1人でどんどん先にいくので私達はいそいで彼女を追いか

けた。

第六話

お城についた私はフランに連れられて大きな部屋にやってきた。そこには、たくさんのメイドさんとドレスが並んでいた。

「さて、涼はドレスで好きな色や形とか あるの？ あるなら言っちゃおうだい」

ドレスなんて無理だ、そもそもスカートが嫌いなものだから。向こうの世界で通っていた学校の制服だって無理やりズボンに代えさせたぐらいなのだから。

「いや、そもそもスカートみたいな、ドレスなんて無理。着るならあの人みたいなのがいい」

そう言って私はドアの近くに立っている人を指差した。その人は何故かびっくりしていたけど。

「なに言ってるのよそんなの無理に決まってるでしょ ！！」

「なら私はこのままでいい。ぜったいあんなの着ないからね」

なんなのよ、女の子ならこんなキラキラしたドレスに憧れたりするもんじゃないの。まあ私も興味ないんだけど。さて、どうしたものかね。

「あの、フラン様どうしましょうか？」

「そうね、さすがにあのままというのはいけないからとりあえず近

衛の正装一式を用意して。時間がないからいそいで」

「わかりました。」

メイドが一礼して去っていった。

「涼、とりあえず近衛の正装一式を揃えてもらってるからそれに着替えなさい。まったくわがまま言って困らせないで欲しいわ」

「人にはそれぞれ好みがあるんだからしかたがないでしょ」

まったく、私が悪いみたいに言わないで欲しいよ。

第七話

しばらく部屋でまっていると、さっき出ていったメイドさんたちが新たな服を持って部屋にはいつてきた。

「フラン様、これで用意が整いましたので準備にかかってよろしいでしょうか？」

「いいわよ。時間もないことだからさっさとやってちょうだい」

なんだか訳のわからないうちに話が進んでいった。まあ、こんな服を着たことがないのでメイドさんたちにまかせることにした。

「それでは、涼さまお着替えを手伝わせていただきます。」

そう言ってメイドさんに促されるがままに着替えていった。

なんとというか自分でいうのもどうかと思うけど、結構似合っていると
思う。

父親似で、どこか男顔なのでなおさらだ。

これなら女性からかなりもてそうだよ。

第八話

「あら、以外と似合ってるのね。ちょっと私のタイプかしら」

「もう少しフランが若かったら考えるんだけど。ちょっと年齢オーバーかな」

たしかにフランは綺麗なんだけど私は綺麗より可愛いがすきなんだよね。何故か昔から好きになるのは女の子ばかりなんだ。家族にもいってないんだけどね。

などと考えてると背筋が凍るような視線を感じすぐさま振り向くとそこには、顔を般若のごとく歪めたフランが立っていた。

いったい、どうして？何か言った？とにかくそんなに怒ってる理由を聞かないと。

「えっと、フラン様はどうしてそのように怒っていらっしゃるのでしょうか？」

「あら、さっきの自分の発言に私を怒らせる理由があるのだけど、思いつかないかしら？」

さっき、私はなにを言った。無意識に言ったことなんだよね。たしか、タイプだと言ったフランに年齢オーバーで駄目って言ったんだよね。

あっ、そっか、女性に年齢の話は禁句なんだった。何処の世界に

行ってもそれは同じなんだなと深く思いつつ、さて、フランの対処方法を考えないと。

第九話

さて、どうしようかな。たいして考えないで言ったのが間違いだったよな。これからは気を付けないと。

「フラン、別にフランが若くないってことじゃないんだよ。フランは、ホントに綺麗でそれで、えっと……」

やばい、言葉が浮かんでこない。いつもならスラスラ言い訳なんて出来るのに。なんか調子が狂ってるな。

「まったく、もういいわよ。それよりも、女王様を待たせるわけにいかないんだから、早く行くわよ」

フランはさっさと部屋を出ていったので、私はいそいでメイドさんに礼をいってフランの後を追いかけた。

しばらく、かなり輝かしい廊下をあるきながら私がきよろきよと見ているとあっという間に謁見の間についてしまった。

「いい、女王様に失礼のないように気を付けるのよ。さっきみたいに年齢の話なんてしないのよ。できるだけ、敬語ではなさないよ。」

「わかった、やれるだけやってみます。」

ビシッと私はフランに敬礼した。

大丈夫なのかしらこの子はちょっと素直すぎるのが心配なのよね。
でも、まあなるようにしかならないかと思ひ私はドアを開けた。

第十話

フランの後に続き私も部屋に入っていた。玉座にはとても、綺麗な女の人が座ってこっちを見ていた。

その女王の両端には六人の女の子がすわっていた。森であったあの女の子もいた。

「女王様、今回召喚された勇者を連れてきました」

「お疲れ様、フレア。朝も早くからわるかったわね」

「いえ、これは国のためですから。」

なんとなく私は何していいのかわからず、あちこちに視線を泳がせていたら急に女王様が話しかけてきて、ちょっとビックリした。

「まあ、とりあえずは自己紹介から始めましょうか」

第十一話

「まず、私からさせてもらいましょうか。」

私がこの国の女王、フリージア・シルバーだ。私が巫女に頼んでこの国を救うであろう勇者を召喚してもらった。」

えっ、ならこのめんどくさい事態はこの人のせいなの。まったく、もっと他に人いるのにどうしてよりによって自分だったのかまったく理解できない。

「それなら、次は私が自己紹介します。」

私は、アイリーン・シルバー。この国の第一皇女です。アンって呼んでね」

「次は、私だ。ジャステイーン・シルバー。第二皇女だ。ジャスト呼んでくれ」

「私は、ミーシャ・シルバーです。第三皇女です。ミーシャと呼んでください」

「私は、先ほどもしましたが改めて。ステファニー・シルバーです。第四皇女です。ステフと呼んでください」

次々と王家の人達が自己紹介してくれた。

「次は、私、あなたをこの国に召喚した巫女のヴィオラ・マクシムです。ヴィーと呼んでください」

「最後は私ですね。私は、ヘリアンツス・オルガ。リアと呼んでく

ださい」

あちら側の自己紹介が全員終わったのでこっちの番となった。みんなに注目されていてかなり恥ずかしい。

「私は、南涼です。どうか涼と呼んでください」

第十二話

「さて、自己紹介も終わったことからまずは何故涼をこの世界に召喚したか説明しよう。

この国は千五百年前に、初代女王となるマルガリータがこの地に魔王を封印したことから始まった。封印は成功したのだが年月がたつにつれ綻びてしまう。決まって百年に一度。そして、今年がその年になった。

マルガリータじたいが異世界の人間だとも言われていて、そして、マルガリータの異世界にいる子孫の誰かが召喚されているみたいだ。そして、今回は涼が召喚された」

いつきに長々と女王が説明してくれたんだけど、なんだか現実味がない、そして、何故よりによって自分なのかと。正直自分が勇者とか似合わないのがわかってるのにな。どうやったら断れるのか。

「ああ、涼には拒否権ないから、なにがなんでも魔王を再度封印してもらうぞ。私もこの国をこの国の民を守らねばならぬからな」

「そんなの、こっちには関係ないし。正直、この国の民なんてしたことじゃないんだ。何よりも自分が大事、早くもといった世界に戻せよな」

ちょっと興奮気味に話す私に女王が冷酷な言葉をかけた。

「我が命にそわぬのならそなたが泣いて懇願するまで拷問なりなんでもしようか。そこまでするほど我はこの国が大事なのだ」

第十三話

「落ち着いてください。心から救いたいと思っていただけなければ充分な力を手に入れられないのです。前にも女王にはお話したでしょう。ほんとうに。涼自らがこの国を守り救いたいと願ったときには前回と同じように魔王を封印出来るほどの力を手にいれることができるのですよ。」

それから、今は魔王の力が強まっているせい、か時空が安定しないため涼をもとの国に帰すことは難しいのです。

だから、取り敢えずこの国で過ごしてみてくださいませんか？少しでもこの国のことを知ってもらいたいのですが」

めんどくさいことは嫌いだから断りたいのだけどね。必死にお願いされると、ましてやこんなにも可愛いこのお願いに頷くなというほうが無理だよね。

「そうですね。あなたがそう言うのならこの国を知るのもいいですね。もしかすると私の考えを変える何かがあるかもしれませんからね」

「なら、涼には王立学院にでも入ってもらうか。ちなみに年はいくつだ」

こんな異世界にきてまで学校いかないといけないのか。

「今は一五歳ですよ」

「なら、我が娘ミーシャと同一年だな。それでは、涼の面倒はミーシャにまかせる事にするか。」

ミーシャよ涼のことをお願いしてもよいかの？」

「あっ、はいわかりました。

涼、これからお願いしますね」

「こちらこそ、どうかお願いします」

「まあ、まだ学院は休み期間で開始までしばらくあるから王都でも観光してみればよい。そなたの国にはないものもたくさんあると思うぞ。

それと、フランに魔術の練習をしてもらえ。たぶん、まもなく涼に、魔力が現れだす暴走させないようにしっかり指導してもらうのだ。

そういうことでフラン頼むぞ」

「はい、わかりました。ミーシャ様のちほど涼の日程表を作りますよう」

「そうですね。以外とすることがありますので」

などと話しは進んでいった。本人はまったくついていけないのだけど。

第十四話

とりあえず、今日夕方からパーティーを開くのでお披露目はその時にするからそれまでは自由にしていいていいとのことになった。

さっそく私は、同い年というミーシャと仲良くなりたかったのでお城の案内を頼もうと思う。ちょっと人見知り気味なのでかなり勇気がある。

「あの、ミーシャこのあと予定がなかったらちよっとお城の案内をしてもらいたいのですが」

「ええいいですよ。今日は何も予定がなかったのです。それと、無理に敬語を使わなくていいですから普通に話してください」

「いやあ、王族っていうと偉い人達だからちよっと緊張しちゃってね。まあ、正直、敬語とか苦手だから普通に話させてもらおうよ」

「ええ、それでかまいません。

それより、どこから案内しましょうか。城はとても広いのでゆっくり時間をかけて案内しますね」

「全部、ミーシャにまかせるよ。まったくわかんないからね」

今日中に回れなくても女王が言うには学院が始まるまで一月以上あるらしい夏休みみたいなものだ。だから、ゆっくりじっくりこの城を見学しよう。後は街にも行ってみたいな。

第十五話

さて、どこから案内しましょうか。そんなことを考えてると声が聞こえた。

「今から模擬戦だ。順番に私にかかってこい。」

これはジャス姉さんの声だね。さっそく仕事してるんだ。よしっ、まずはジャス姉さんのところにいきましょう。

「涼、まずはジャス姉さんのところにいきましょう。剣術など興味ないですか？」

「あるよ。私は、向こうの世界で剣術習ってたんだよね。それなりに強いんだよ」

「それなら、よかった。では、さっそく移動しましょう」

そう言って、私たちはジャスがいる練習場に移動した。

「ジャス姉さん、少し見学してもいいですか？涼が剣術に興味あるみたいで。」

「ああ、構わない。怪我しないように離れてみているようにな。」

「はい、わかりました」

そうやって私たちは離れた場所に座って見学することにした。

それにしても、どうして一国の皇女が近衛なんかにいるのかまったくわかんないなあ。

「なあ、ミーシャどうしてジャスは近衛なんてやってるの？ かりにも、皇女がする職業ではないような・・・」

「そうですね。たしかにジャス姉さんが近衛に入ると言った時は母はかなり反対しました。でも、ジャス姉さんの意志がはかなり強かったのです。この国をそしてこの国の民を守りたいとかなり真剣に母と話していました。そうして、ついに母が折れたのです。そこまでの思いがあるのならと。」

「へえ、なんか大変だね。まあ気持ちわかるなあ」

家の重圧なら自分も感じたことがある自分はそれに耐えきれなくて逃げてるだけだけどジャスはきちんと向き合って自分で決着つけたんだね。

「涼、ジャス姉さんが呼んでいますけど」

なんか向こうでジャスで手招きして私を呼んでるようなんですけど、なんかめんどくさいことになりそうだな。

第十六話

私は、嫌々ながらジャスの方に近付いていった。

「ジャス、何かよう？」

「涼、剣術に興味あるなら多少は経験者か？」

「まあ、護身程度には習っていただけだよ」

「それなら、ちょっと涼の腕前をみるために手合わせしよう。どうせ、これから涼の剣術を教えるようになったし。これからの方針のためにもな」

ああ、めんどくさいことになった。剣術に興味あるなんて言わなければよかったよ。でもどうせ後でしないといけないんだろから良しとしておくか。適当にやって早く切り上げよう。

「まあ、いいけどジャスの相手なんてならないからあつというまに負けちゃうよ」

「今回は試合じゃない。あくまでも腕試しだよ。涼がどれくらいやるかの。」

さて、とりあえず軽く準備運動して体があつたまつたら中央にきてくれ。」

「了解しました」

ということで、まずは簡単なストレッチでもしようかね。

もくもくと体を動かし少し慣れてきたら剣をかりて素振りの練習を
してからジャスのいる中央のどこまでいどうした。

第十七話

「もう、準備はいいのか？」

「大丈夫、大丈夫」

「それなら、始めよう。審判は副隊長のシャインにやってもらう。シャイン頼むぞ」

「はい、わかりました。それでは、両者ともに定位置についてください」

なんか凄いことになってない。観客増えてるし女王まで観戦してるよ。まずいな、非常にめんどうだ。とっとと終わらせてお腹も空いたし昼食に連れていってもらおうとしようかな。

「両者、構えて。

始め！！！！

」

シャインの号令と共に私は、ジャスに突撃した。とりあえず先手必勝というやつだ。

だが、やはりプロには勝てないかなあっさりとかわされた。久しぶりの試合なので勘が鈍ってるよ。

なんとか、ジャスの攻めをかわすので精一杯だけどジャスの隙をついて狙えばいけそうなんだけどめんどくさいよね。どうやって終わらせようか。

「涼、考え事などやめて打ってきてみたらどうだ。まだまだ、本気などだしてないだろ。手を抜いてるのがまるわかりだぞ。本気ださずには負けてもしたらしごきまくるからな」

やばい、やっぱりプロだ考えが読まれてる。仕方がないこうなったら真面目にやるしかないか。でも、たぶん勝てちゃうよ。そうなたらそうなたでめんどくさそうなんだよね。

よしっ、こうなったら真面目に戦って最後油断して隙を作って負けよう作戦にしよう。演技力がものを言うから大変だ。

第十八話

それでは、始めようか。

「それじゃ、行くよ。」

「ヤアッ！」

まずはジャスの正面からうちに入った。まあ簡単にかわされるよね。

「なんと、小癪な。次は、当てるよ。」

「ヤアッ！！」

今度はジャスの背後に回り込み一撃を打った。

「甘いぞ、そんなのでは私に一撃も打つことができないぞ」

そういうと今度はジャスがどんどん打ってきた。アマチュア相手にプロが本気でやるのはどうなんですかと言いたいくらいにジャスは打ってきた。

もう限界だ。次のターンでわざと隙を作って打たせよう。

「負けてなるものか、行くぞ！」

さっきより一段と素早くジャスに近付いていった。横から一撃を打った。脇はがらあきだよ。よし、ジャスよ打ってこい。痛いのは嫌いだけどこれはしょうがない。

「涼、脇ががらあきだぞ。わざとなのか」

ジャスが私の脇に打ち込んでそれでやっと終了した。

「一本、それまで!!」

ああ、やっと終わった。でも、これから剣術も習わないといけないのか。疲れるこの世界これならむこうのがまだましだよ。

「涼、今のはわざと隙を作ったな。」

「そんなことあるわけじゃないですか。そんなこと考える余裕もなかったんですから」

やばい、テンパり過ぎた何故か敬語になってるし怪しすぎだよね。

「そういうことにしといてやる。次回からの稽古を楽しみにしておくことだな」

終わったな。こんなことなら真面目にしておいたほうがよかったよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6105y/>

夢か現実か??

2011年12月6日13時51分発行